

人・ひのきしん 生・記

「手話」2 その3



「手話の御用を通して、神様にご恩返しをしたい」。受講生に笑顔で手話を指導する
中村さん
(同)

「手」に託す、
この思い

中 村恒^{ひさし}（72歳・田布施分教会教人・山口県田布施町）の脳裏に、いまでも残っているのは、所属教会で「兄」と筆談する「母」の姿だ。

戦時中、父親の仕事の関係で、家族で朝鮮半島へ渡った。

その後、現地で両親を亡くす。終戦の翌年、5歳だった中村を、日本へ連れ帰ってくれたのは、近くに住んでいた天理教の布教師だった。

帰国して、自身の遠縁に当たる教会に引き取られた。そこには、耳が不自由な12歳上の「兄」がいた。養母が筆談で兄と話す姿が、胸に焼きついた。

「母の力になりたい」。子供心に、手話を勉強したいとの思いが芽生えた。

高校卒業後、修養科に入り、課外講習で手話を学んだ。その後、親里で開かれていた講習会を受講し、聴布連の活動にも参加した。5年ほど後には、修養科の手話通訳を任されるまでになった。

「ほとんど、ろう者に教えてもらいながらの通訳で、果たして通訳になっていたのかどうか（笑）。でも、皆さんのおかげで上達できたように思う」

ほどなく、地元の「ろうあ連盟」で囑託通訳をするようになり、いまでも地域の手話サークルで講師を務める。

手話通訳をするに当たり、いつも大切にしているのは「相手に伝えたい」という思い。別席の通訳では、教理が正確に伝わっているかどうか不安になるときもある。しかし「手話は、上手い下手ではない。『なんとかして伝えたい』という気持ちが大切」と信じ、手を動かす。

振り返れば半世紀以上、手話に携わってきた。その原点には、日本へ連れ帰ってくれた布教師、実の子供と同じように愛情を注いでくれた養父母、そして耳の聞こえない「兄」との不思議な巡り合わせがあった。

「神様がお引き寄せくださった、たくさんの方々との出会い。私は多くのものを神様から頂戴している。そのご恩を、ひのきしんでお返ししたい」

手話を習得してから「兄」との距離が縮まった。時には、耳が聞こえないことからくる、やり場のない思いをぶつけられることもある。それでも「手話ができるようになったことをとても喜んで、頼りにしてくれている」と話す。

古希を過ぎたいまでも、手話の勉強を続けている。「自分自身が言葉の意味を十分に理解していないと、通訳できないからね。これからも手話通訳者として、末永く御用に使っていただきたい」と微笑んだ。

※天理時報 2013年12月8日号より。記事の内容等は掲載当時のものです。